

都市計画家の住生活と計画思想・実践との応答関係

—アーバニストたちの史的経験—

主査 中島 直人^{*1}

委員 武田 重昭^{*2}，後藤 智香子^{*3}

日本の都市計画史において「都市をつくる」と「都市を生きる」とを重ねあわせた領域を意識的に探究した 3 人の都市計画家、石川栄耀、椽内吉胤、大村虔一について、彼らの住生活の様相と都市計画の思想・実践との応答関係を明らかにした。時代も場所も異なる 3 名であり、それぞれの動機をもって、アーバニスト的な行動をとることになったが、都市計画の担い手に関する問題意識がアーバニスト的活動を導いた点、そしてその住まいを地域活動の拠点として開く経験をしていた点は共通していた。

キーワード：1) 住まい，2) 住み開き，3) 拠点，4) 市民，5) まちづくり，
6) 都市計画論，7) 石川栄耀，8) 椽内吉胤，9) 大村虔一，10) 大村璋子

THE RELATIONSHIP BETWEEN HOMES, LIFE, THOUGHTS, AND PRACTICE IN URBAN PLANNERS

-The historical experience of urbanists-

Ch. Naoto Nakajima

Mem. Shigeaki Takeda, Chikako Goto

This study clarifies the relationship between homes, life, thoughts, and practice in three urban planners – Hideaki Ishikawa, Yoshitane Tochinali, and Kenichi Omura - who consciously explored the overlapping areas of “planning a city” and “living in a city” in the planning history in Japan. Although the three men were from different eras and places, and each had their own motivations for becoming urbanists, they were all united in their awareness of the issues surrounding the people who carry out urban planning, and in their experience of opening their homes as bases for local activities.

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

従来から、「都市計画家」や「都市プランナー」と称されてきた都市計画の専門家については、計画技術や計画思想のありかたが問われてきた。また、都市計画における市民参加や市民主体のまちづくりの普及・展開とともに、地域の人々とともにボトムアップでまちの環境改善に取り組む「まちづくりプランナー」というべき専門家も登場し、各地で活躍を続けている。時代とともに都市計画の専門家のありようが変化していく中で、都市の成熟や縮退への対応が課題となっている近年では、都市計画の専門家の中でも、単に（トップダウンであれボトムアップであれ）計画立案やその実施に関わるのではなく、都市計画を通じて得た都市の問題発見・解決能力を都市の魅力発見・創造能力へと自然に発展させ、自らの暮らしにおいていかに都市に親しむか、その親しむ姿勢と活

動を通じていかに様々な人々をつなげていくか、そのつながりから都市のありようをいかに創造していけるのかに関心をもち、実践する人々が増えてきている。

一方で、そもそも都市計画の専門家とは従来呼ばれることがなかった様々な立場の人々が、都市に生まれつつ沢山の余白・空白（空き家、空き室、空地）、ようやく開かれ始めた公共空間（公園や街路）を舞台に、実存感溢れる場所と暮らしを創造し、都市との距離を一気に縮めるようになってきている。もちろん、そうした場所や暮らしの創造はこれまでのボトムアップのまちづくりでも同じようにあったことだが、組織や団体の取り組みというよりも、個々の人、そのつながりのかたちとしての自然な現れが顕著である点がやや様相を異にする。

中島ら（2021）^{*1)}は、そうした「都市をつくる」と「都市を生きる」の汽水域に漕ぎ出し、その領域を広げていく、都市計画の専門家、都市計画の非専門家の双方から

^{*1} 東京大学 教授 ^{*2} 大阪公立大学 准教授 ^{*3} 東京都市大学 准教授

の動きを捉えて、「アーバニスト」の像を構想的に描き出している。この「アーバニスト」、そしてその背景にある「アーバニズム」を基底におき、改めて、都市計画の専門家論という視座から、日本の計画文化を踏まえたアーバニスト像に関する基礎的知見を、史的アプローチによって構築していきたい。つまり「都市をつくる」＝都市計画の思想や仕事、「都市を生きる」＝都市での住まいと暮らしとの間の応答関係のありよう、その幾つかのかたちを歴史的な経験の中から導き出すことが求められている。両者を結ぶものは、「都市計画家が生きたまち、暮らした住まい」であり、それが本研究の主対象となる。以上より、本研究の目的は、日本の都市計画史において、「都市をつくる」ことと「都市を生きる」こととを重ねあわせた領域を意識的に探究した都市計画家について、彼／彼女たちの住生活の様相と都市計画の思想・実践との応答関係を明らかにすることである。

1.2 既往研究の整理と本研究の位置付け

これまでに都市計画家の都市計画思想・実践と住生活の応答関係について直接扱った研究はないが、都市計画に関わる専門家自らによる住体験の省察は幾つか既往の成果がある。中でも西山卯三の『住み方の記』(1965年)^{文2)}は、西山の60年に及ぶ住体験を建築計画学者の視点で振り返っており、私的な住体験史を日本現代住宅史に接続する構想力という面で、本研究の課題設定に大きな影響を与えている。また、石田頼房・石田裕子『二人で歩いた まち むら 人生』(2006年)^{文3)}も、都市計画研究者・石田の住体験がその地域のコンテクストとともに描かれている。さらに、住体験の中でも都市計画家の原風景に特化したものとしては、伊藤滋『昭和のまちの物語 伊藤滋の追憶の「山の手」』(2006年)^{文4)}や田村明『東京っ子の原風景』(2009年)^{文5)}がある。これらの書籍は、住経験と都市計画思想・実践との関係を強く示唆するものの、何れも原風景に関する自伝的エッセイに留まっており、本研究の課題である応答関係を学術的に検討、議論したものではない。

1.3 研究の構成と方法

本研究は、「都市をつくる」ことと「都市を生きる」こととを重ねあわせた領域を意識的に探究した都市計画家として、表 1-1にある3人の都市計画家に着目する^{注1)}。もとより、日本の都市計画史において、網羅的、俯瞰的にこうした都市計画家をリストアップすることは難しい。ここでは、著者自身の既往研究において、意識的な探求を行っていたことが確認されていることを条件に抽出を試みた。石川栄耀については、中島ら(2009)^{文6)}において、東京・目白の自宅周辺において、目白文化協会を組織し、現在に通じるコミュニティ活動を展開していたことが言及されている。椽内吉胤については、中島(2009)^{文7)}において、故郷・盛岡に自邸を新築し、そこを拠点に都市生活研究会を発足させ、活動を展開していたことが言及されている。大村虔一については、中島ら(2021)^{文1)}が紹介した林泰義の「まちづくりプランナー」論に関する論考において、世田谷の冒険遊び場活動について「実はこのまちづくりが住民の一人であるプランナー大村虔一さんの活動を契機にしている」^{文8)}と言及されている。これら3人の都市計画家は、生きた時代も場所も、そして「都市をつくる」ことと「都市を生きる」こととを重ねあわせ方も異なり、共通項を見出すことは難しいが、まずはこうした事例調査を積み重ねていくこと自体に意味がある。

石川については目白文化協会については知られているが、戦前の名古屋時代の住生活はこれまで明らかになっていなかった。椽内についても盛岡での拠点が具体的にどのような場所で、どのように使われたのかについてはこれまで不明であった。大村虔一についても、自宅と冒険遊び場、そしてそれに関わった人々の具体的な地理的關係は整理されてこなかった。以上を踏まえて、本研究では、文献調査およびインタビュー調査^{注2)}に基づき、第2章で石川の名古屋時代、特に名古屋住宅での住生活と都市計画の仕事との関係について、第3章では椽内の盛岡市加賀野久保田の住居と盛岡での都市美運動との関係について、第4章では大村虔一の世田谷区経堂の住居と妻・璋子とともに展開した冒険遊び場活動、当時の都市

表 1-1 研究対象とする3人の都市計画家

	生年	没年	住生活				都市計画思想・実践		
			住所	住居	居住期間	地域活動	所属・役職	主な著作	主な実践
石川栄耀	1893	1955	名古屋市東区高見(現名古屋市千種区高見2丁目)	名古屋住宅株式会社による一団地住宅	1920年代半ば～1933年：東京転任	・自画像社	・愛知都市計画地方委員会技師	・「郷土都市の話になる迄」(『都市創作』連載、1925年～1928年)他	・名古屋都市計画街路網計画(1926年) ・田代土地区画整理事業設計(1929年～)
椽内吉胤	1888	1945	盛岡市加賀野春木場(現盛岡市加賀野1丁目)	自邸敷地内の離れ(「プロレタリアの小住宅」)	1927年～(1945年：逝去)	・都市生活研究会 ・盛岡都市美協会	・都市美協会常任理事 ・日本都市風景協会常任理事	・『都市計画』(1926年) ・『日本都市風景』(1934年)	・植樹祭(1926年～) ・警視庁望楼問題(1929年～1930年)
大村虔一	1938	2014	世田谷区経堂1丁目	分譲集合住宅の1フロア(経堂コーポラス)	1969年～(1995年：東北大学赴任)	・経堂こども天国 ・桜ヶ丘冒険遊び場	・都市計画設計研究所代表取締役	・翻訳(大村璋子)『都市の遊び場』(1973年)、『新しい遊び場』(1974年)	・赤坂豊南坂地区再開発基本調査(1970年) ・赤坂六本木地区再開発計画に関する指導(1973年)

計画の仕事との関係について論述していくことにする。

2. 石川栄耀の名古屋住宅時代の住み開き生活

2.1 石川の名古屋での住まい歴

石川栄耀は、のちに「私は、その若き名古屋の伸び行く盛りに若き技師として、若気の至りの勝手を盡す事が出来た」^{文9)}と振り返っている。石川が内務省都市計画地方委員会技師の一期生として、名古屋に赴任したのは1920年9月であった。そしてその翌年に、名古屋市は周辺16町村を編入するかたちで、市域を拡張させた。名古屋でも工業化の進展に伴い、人口は急速に増加し始めていた。石川が着任した都市計画名古屋地方委員会に与えられた仕事は、1919年に出来たばかりの都市計画法制度に基づいて、この成長都市を健全な姿に導いていくことであった。1922年に都市計画区域決定、1924年には都市計画道路、運河、用途地域決定と順調に都市計画を決定していった。

石川の名古屋での住まいの遍歴については、彼の従弟で、常に石川の近くにいた根岸情治が著書『都市を生きる 石川栄耀縦横記』(1956年)^{文10)}に記述がある。1920年、独身で名古屋に赴任した石川が居を構えたのは御器所地区であった。旧御器所町は旧名古屋市と隣接する位置にあり、1909年には名古屋市と隣接する一部区域が先に名古屋市に編入されていた。「鶴舞公園の前で電車を降り、公園を横に突き抜けて畑の中の一本道を十分ほど歩くと鎮守の森があり、それを中心として、草ぶき屋根の多い田舎じみた場所に彼の下宿している家があった」^{文10)}という。この鶴舞公園から御器所にかけての一带は、名古屋における市街化を目的とした耕地整理の嚆矢とされる東郊耕地整理事業が1912年より開始されていた、当時の市街化の最前線であった。

1922年、石川はかねてから付き合いのあった女性と家庭を持ち、当時の市域の外に当たる鳴子、旧名古屋市域の下町にあたる杉村にそれぞれ短期間、居を構えた。その間、石川は1923年から24年にかけて1年間の欧米出張に出かけている。そして帰国後、石川夫婦が新居として選んだのが、鶴舞公園や御器所よりもさらに東に位置する、覚王山手前の名古屋市東区高見であった。ここには、市内の住宅不足に対処するために、当時の名古屋財界の有力者たちが出資して1919年に設立された名古屋住宅株式会社によって一団地の住宅地が建設されていた。石川は1933年に東京に転任になるまで、「名古屋住宅」と呼ばれた百棟あまりの一団地の一住戸に家族とともに暮らした。

2.2 名古屋住宅における石川の住生活

名古屋住宅は、大、中、小の3つのタイプの住戸で構成されていた。大は二階建てで、入居者は大企業の支店

長、市の局長、中は八畳・六畳・六畳・四畳半・三畳からなる住戸で、入居者は大学教授や市の職員、小は六畳・六畳・六畳の間取りで、入居者は新婚の若いサラリーマンであったという。当初からの入居者であった鼓常良(第八高等学校教授・ドイツ文学)の子息で、自らもこの住宅地で育った鼓肇雄は、「最初の頃名古屋住宅に入った人達は、今から考えるとのんびりしていてゆとりがあった住宅居住者の間で親和会という親睦団体が出来、毎年一回鈴木別荘の庭園で園遊会を開いた。(中略)親和会の園遊会以外でも夜一軒の家に集まって時々演奏会が催された。こうした雰囲気があったのは、多少は大正デモクラシーの名残りであったかも知れない。(中略)このような大正デモクラシーの精神的昂揚はもちろん命が短く、夢の如く消えてしまった。名古屋住宅の親和会もせいぜい、二年か三年でなくなってしまった。不況が長びいて世の中がせち辛くなるにつれて、そんな気分的な余裕はなくなった」^{文11)}と回想している。根岸はこうした名古屋住宅に対して、「知識階級の持つ独善的な、排他的な、従って利己的な雰囲気」^{文10)}を感じ取った。現時点で判明している名古屋住宅の当時の入居者は図2-2のとおりである。確かに知識人階級が多く、暮らしていたことが分かる。なお、鼓の回想中にある鈴木別荘とは、名古屋住宅のすぐ近くにあった、鈴木パイオリン製造株式会社の創業者・鈴木政吉の邸宅である。鈴木家は名古屋株式会社の大株主であった。

石川はこの名古屋住宅地の中タイプの住宅で暮らした。その住まい方については、やはり根岸の記述が参考になる。根岸は「彼は八畳の客間に、床の間と云わず、窓と云わず、所かまわずビールの空箱やミカンの空箱を、そのままきたならしく天井まで積み重ね、それに本や書類をギッシリ詰めこんでまるで物置か倉庫のようにして、いっこうおかまいなしでいた。次の間は居間になっていて、其処に冬は炬燵を作り、夜などは毎晩のように近所の者や役所の若い連中が集り、トランプを花札をやったり、演劇の本読みや、短歌会や絵を画いたり、哲学や文学を論じ合ったりして、いつも大変なにぎわいであった。」^{文10)}と書いている。名古屋住宅で石川の住宅と壁一枚を隔てて隣接していた住戸に暮らしていた、当時、愛知県社会主事であった三上孝基は「僕は壁一重で同じ長屋に阿伎工房と隣り合って住まふ光栄に浴したわけだ。当時此の住宅には同じく都計の長澤君、谷口君、耕整の大野君、やや商売違いでは、野砲の美座君、名古屋新聞の濱野君等が住んで居た。是等の連中が毎晩のように集まって工房を賑わして居たものだ。近所に住んで居た根岸君、岸君、少し離れて尾関君なども勿論常連だ。」^{文12)}と回想している。つまり、石川は自宅の5つの部屋のうち、最初の八畳の客間に仕事のための書籍や書類を詰め込み、その次の六畳の居間を「阿伎工房」と名付けて地



図 2-1 名古屋住宅と田代地区土地区画整理事業の小公園予定地 (『名古屋市東区最新地区』, 1934 年 9 月)

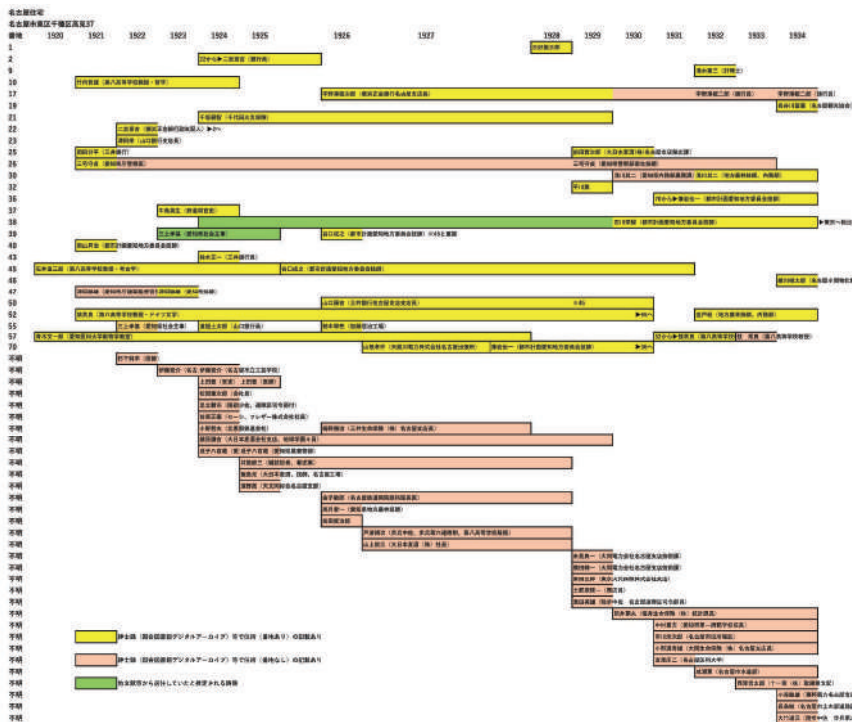


図 2-2 名古屋住宅の居住者 (「国会図書館デジタルコレクション」による住所検索による判明分)



図 2-3 戦前期の名古屋住宅付近 (名古屋航空写真刊行会編『航空から見た戦後 40 年の変貌』, 航測写真センター, 1987 年所収の写真 (246—247 頁, 250—251 頁 (撮影 1936 年—1942 年) を統合、加筆)

域や友人たちに開放していたのである。
阿伎工房では様々な活動が行われたが、ここに集った

人々は自画像社という組織を立ち上げた。阿伎工房を拠点とした自画像社は、月一回の例会を開き、「当時の風潮

のセトルメント運動」^{文12)}を展開した。具体的な活動としては、野球団（石川は一塁手）、文化運動（雑誌発行、短歌会、油画、劇、音楽）、隣人大学（県下小都市巡回型の押し売り講演）、啓明学園（県庁内での補習教育）などであった。三上は「併し阿伎工房は仕事もやった。社会事業の方ではあるが、不良住宅改良事業の初期に、下奥移転問題で高見に百姓一揆が起りかけた騒動の策源地も此処だった」「名古屋の街や道路も、この工房の薄汚い六畳の部屋でコネクリ廻されて生れたものだろう。時々、夜中過ぎて、ポン、ポンへと、食用蛙のやうな間抜けた音がして来て、よく悩まされたものだが、そんな時こそ、此の阿伎工房の最も緊張した労働時間だったらしい。もっともギターは習い初めだった。」^{文12)}と回想している。つまり、阿伎工房では、単に地域の親睦活動やセトルメント運動だけでなく、石川の都市計画や三上の福祉関係の仕事もまた、この開かれた場所で議論され、検討されたのである。ここに「都市を生きる」と「都市をつくる」の汽水域を見てとることは容易である。そして、根岸は、先に指摘した名古屋住宅の利他的な雰囲気に対して、石川のこうした暮らし方は、「向う三軒両隣り式な明るい気分を醸成した」^{文10)}と評価している。

2.3 石川の計画思想・実践との応答関係

石川の名古屋での最初の生活圏は、1920年代の市街化の最前線、東郊耕地整理事業区域にあった。名古屋住宅もまた、1930年代にかけての市街化の最前線であった。この住宅地のすぐ東側の旧田代町では、1929年に田代土地区画整理事業組合が結成され、将来の宅地化を見すえた事業が開始された、この田代地区の区画整理の設計を担当したのが石川であった。ここでも、石川の生活と仕事は地理的な近接性、連続性を持っていた。

田代地区の区画整理設計は、石川の都市計画思想を強く反映していたことで知られている。設計の特徴は第一に小公園（後に小学校用地に変更）を中心としている点、第二に街路網が小公園から放射状に設定されている点、第三にY次の交差点を多用している点である。石川は中心性の設計に関して、従来の区画整理にありがちの中心性を欠いた基盤目状の街路網を批判し、「問題は中心に何を選ぶべきかにあるのである。それは社会公共的な意味をもち、親和的な意味をもち、そして最後に決して『他となる』おそれのないものであればそれでよい。自分は小公園を探しあてた」^{文13)}とした。一方で、放射状の街路網については、「心理的に結合すること。（中略）放射循環形式に広場を適当に配する組立ての場合、各街路はそれに面する各家屋の共通前提となり従ってそこに小さき Community の萌芽が発生する」^{文14)}とその意図を述べている。Y字の交差点については、レイモンド・アンウィンの技法を引いて、「この（Y字構成）にアンウィン氏

は実に豊富な緑地を添える。その事が未だ広場の味を感じ得し得ない日本人等の心へは果して価値として、うつり得るや否や問題である。」^{文14)}と述べている。石川は、こうした設計を通じて「単に都市の黙々たる下僕であった都市計画技術家が、かくの如くして、散逸せんとする人類の結び目をより新鮮なる形式に於いて、回復する役目に僥倖するものであるとしたら、何と働き甲斐のある日々であろうか」^{文14)}と論じた。

石川は都市創作会を主要メンバーとして、『都市創作』に数多くの論考を寄稿した。その中で石川は都市計画技術についてのみならず、都市計画の市民化について頻繁に論じた。『都市』というものは、市民からは放任され、市役所からはお役目丈の心配をして貰う丈で、心から考えて貰った事は一度もあるまい」「これで都市が、本当の市民の為の、しっくりした心地よき都市に、なる事が出来たら手品だ。市長が、市議員が、理事者が、市民が、特に直に自己の生活たる可き市民が、親身になってあけ暮れ楽しみ考える事なしに、いつ市民の都市が出来様ものぞ」^{文15)}と訴え、都市は市民の化合体であることを繰り返し述べた。石川は具体策として、三種類の市民倶楽部、即ち、アウトドアのレジャーを楽しむ遊楽連盟、社交サークルである隣人倶楽部、自分の町を歩き、その改善を自由に提案する都市批判会の設立を主張した。石川が名古屋住宅において、自宅を開放して行った活動は、田代地区の区画整理の設計趣旨とも共通して、人々の結び目の回復、コミュニティの醸成を目指したが、その活動内容は、3種の市民倶楽部の全てを横断的にカバーするものであった。石川の都市計画家としての計画思想や実践と、名古屋住宅での住生活の中で営まれた活動とは、シームレスにつながっていたことが見て取れるのである。

3. 椽内吉胤の盛岡での拠点住居と都市美運動

3.1 椽内の住まい歴

椽内吉胤（本名表記は柝内吉胤）は盛岡生まれである。柝内家は旧南部藩士族の家系であり、吉胤の本籍は盛岡市餌差小路27である。餌差小路は盛岡城下町以来の肴町や十三町といった町人地と遠曲輪濠を挟んで隣接していたかつての御餌差衆（鷹狩の鷹の餌を調達する役目）の居住地であり、文化年間（1804年—1818年）以降は一般武士の屋敷が立ち並ぶようになった。父の旧藩士・柝内吉トは秋田県庁に務める土木技師であった。椽内は1902年4月に盛岡中学に入学し、1907年3月に同校を卒業している。盛岡中学の一学年先輩にあたり、のちに東京帝国大学建築学科を卒業し、東京市に建築技師として長く務めた小野二郎は、幼少期を回想した文章において、「友人柝内吉胤君は外加賀野の人で川をへだてて僕の当時の遊び仲間だった」^{文16)}と椽内に言及している。小野は中津川沿いの愛宕山麓の下小路の出身であり、同じく中津



図 3-1 昭和初期の盛岡市加賀野周辺と椽内吉胤の自邸位置（『盛岡市街図』、1928 年）

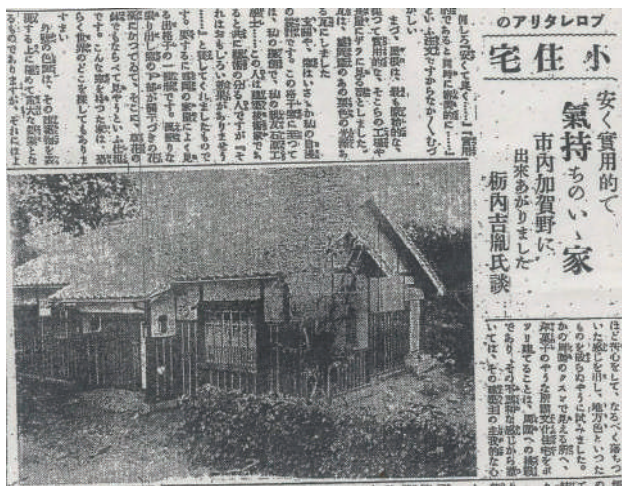


図 3-2 プロレタリアの小住宅の完成を伝える新聞記事（『岩手日報』、夕刊、1927 年 7 月 22 日）

川沿いの加賀野とは対岸同士の関係にあった。椽内は盛岡中学卒業後、岩手県庁に勤務したのち上京し、早稲田大学文学部に進学した。その間の 1908 年に、内加賀野小路との交差点近くの外加賀野小路沿い、字久保田の土地を取得している。

早稲田大学を 1914 年に卒業したのち、同年 9 月から 1915 年までは佐渡毎日新聞主筆として佐渡に居住し、1915 年 5 月から 1918 年 10 月まで東京朝日新聞の社会部記者を務めた。早稲田大学時代は大学近くに居を構えていたが、朝日新聞時代は芝琴平町 2 番地唐木田方で暮らした。その後、1919 年 9 月に労働者の趣味、教育を扱っ

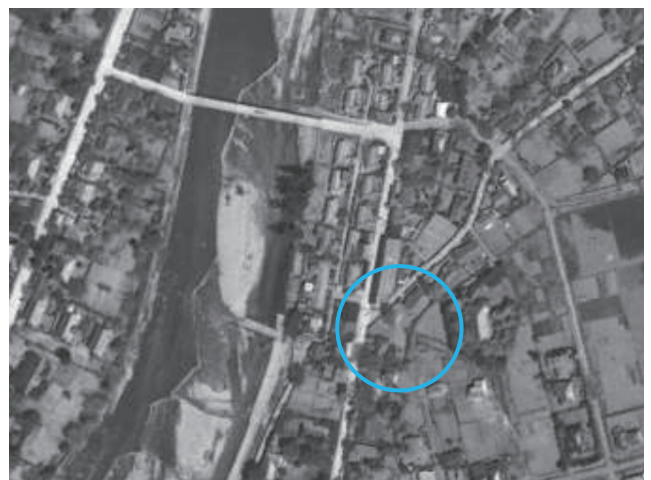


図 3-3 1948 年時点での元椽内吉胤自邸地（国土地理院空中写真、1948 年 5 月 15 日撮影（USA-R1428-100））

た工人新聞を創刊した。椽内はこの頃、早稲田大学からも近く、早稲田大学生向けの下宿が軒を連ねていた戸塚区諏訪町に居を構えた。住所は当初は戸塚区諏訪仲町 94 であり、のちに戸塚区諏訪 173 番地となった。1945 年の空襲で焼け出されるまで、この地で妻、及び子供 4 人と暮らした。つまり、1925 年に都市美研究会を創立し、翌年に都市美協会に改組、さらに 1934 年には日本都市風景協会を創立した都市美運動家・椽内の住生活の拠点は、東京の早稲田近くにあった。

東京を拠点としていた椽内であったが、盛岡市加賀野久保田の外加賀小路沿いの土地、そして自邸は維持して

いた。1927年7月、盛岡の自邸の敷地内に新たに住宅を建設した。自ら「プロレタリアの小住宅」と呼んだこの住宅が、その後、東京と盛岡を行き来し、活動するようになる椽内の盛岡での拠点となった。なお、1945年11月に椽内が亡くなった後、自邸やこの住宅を含む土地を椽内から相続した長男・柊内里吉は、1946年2月にこの土地を手放している。

3.2 プロレタリアの小住宅と盛岡の都市美運動

椽内が1908年に取得した土地（盛岡市加賀野久保田59および60）は、内加賀野小路と外加賀野小路の接続部にあたり半分（60番地）は内加賀野小路沿いの宅地、残りの半分（59番地）は畑地であった。両小路は江戸時代より下級武士（御徒組）が屋敷を構えていた土地柄であったが、その背後は加賀野田圃と呼ばれ、1924年に耕地整理事業が始まるまでは広大な田園地帯であった。一方で、1922年、内加賀野小路の先に盛岡市で最初の市営住宅21棟（一戸建て15棟、二戸建て2棟、四戸建て4棟）が建設され、当時の市長により新たにこの市営住宅の周辺一帯が文化小路と名付けられた。コンクリートの土台に縁側や大きな開口のある外観、さらに大和スレート葺の仕上げで、コンクリート枠を用いた共同井戸の設備なども含めて、命名通り、最新の文化住宅であった。対岸の愛宕町とを結ぶ文化橋も架橋された。以降、耕地整理の進展にともなって、加賀野一帯は盛岡における高級住宅地として発展していった。

東京に活動拠点を持っていた椽内が盛岡の都市計画に助言者、批評家として関わり始めるのは、1925年8月、札幌視察の途中に久しぶりに盛岡に立ち寄った際に、盛岡中学時代の同級生である阿部康蔵が所長を務める職業紹介所にて開催された都市計画に関する講演会が契機であった。椽内は市議員、実業家等30名ほどの聴衆を前に参考品を陳列し、発展の兆しが出てきた盛岡市に都市計画を導入し、計画的な市街化を進めること、その際は都市を全市民の一個の家庭と考えていく「都市芸術」が重要であると説いた。実際に盛岡市は1926年1月に都市計画調査会設置を計画し、市会に予算請求をかけた。1月12日には『岩手日報』に都市計画調査会の必要性を訴える評論が掲載された。この評論において、椽内のことが「当市からは都市計画の権威柊内氏を出している。氏の意見を聞いて、その調査を進めるならば、立派なものが出来上がると思う。」^{文17)}と言及された。以降、主に『岩手日報』の誌上への寄稿というかたちで、椽内と盛岡の都市計画との関係が構築されていった。

『岩手日報』での寄稿もあり、盛岡に帰る機会が増えていた椽内は、1927年に加賀野の自邸敷地内に新たに「プロレタリアの小住宅」を建てた。この住宅は椽内のアイデアを、椽内の従兄で盛岡銀行営繕課長であった建

築家・久慈謙司が図面化し、それを椽内が見込んだ盛岡の大工が施工したものであった。「安くて良く」^{文18)}というモットーと「実用的で同時に芸術的」^{文18)}という持論の実現を目指した。『岩手日報』の記事に掲載された外観写真からだけでは、確認できない点もあるが、椽内はこの住宅の設計について、屋根は盛岡産の栗色の光沢ある瓦を使い、窓は盛岡によく見かける出格子の一変形としての格子窓とし、欄干付きの花台に草花の鉢を並べることを想定していると述べている。また、外形の色彩については建築物を表現する上で極めて重大な要素だとし、「なるべく落ちついた感じを出し、地方色といったものを破らぬように試みました。かの周囲のクスンで見える所へ、洋菓子のような所謂文化住宅をポツリ建てることは、周囲への挑戦であり、その不調和な感じから惹いては、その建築主の主我的な心情までもうかがわれてイヤ味なものです。たとえ、そうでないにしても、ない腹まで探られるような結果になることをおそれる者であります」^{文18)}と考え方を示している。つまり、椽内はこの住宅の設計を通じて、日ごろから主張していたまちの個性、地方色を守り、個々の建築が目立つのではなく、町並みとしての調和、あるいは町並みへの寄与を重視することを実践しようとしたのである。

この「プロレタリアの小住宅」が実際にどのように使われたのかは不明な点が多い。しかし、分かっていることは、この住宅が盛岡の都市美運動、まちづくり運動の起点となったことである。1927年の10月5日には、家屋のお披露目も兼ねて、東京での生活経験があるが現在は盛岡で暮らしているという人達を集めて「東京を語る会」が開催された。椽内の盛岡の友人たちが多数集まり東京について語り合ったが、いつしか話題は現在の盛岡での生活へと移行していった。「東京を語る会」は盛岡を見直す会になった。そして、この会に集った椽内の友人たちが中心となり、盛岡という都市・郷土を研究する「五日会」が発足したのである。そして、翌1928年1月22日、今度は盛岡公会堂にて、都市生活研究会の発会式が行われた。会の活動趣旨は「都市計画は単なる都市造営的の変形改造であってはならぬ。■[判読不可能]新的な市民の意図が都市形態の上に現れねばならぬ」^{文19)}というものであった。椽内は発熱のため発会式は欠席したが、『岩手日報』の「昨秋十月柊内吉胤氏帰盛の際同氏の新居を中心として会同し都市生活の研究会を開催する事となった市内青年有志」^{文20)}によって会が設立されたと椽内と「プロレタリアの小住宅」の寄与が報道された。

都市生活研究会は発会式を機に活動を開始し、椽内も1928年4月に開催された植樹祭には帰省し参加した。しかし、椽内が帰省する機会は多くなかったようで、会の活動も1年余りで途絶えていった。その後、1935年には都市生活研究会の活動の反省も踏まえて、新たに椽内を

顧問とする盛岡都市美協会が設立され、講演会や座談会、まちあるきなどの活動を再度、展開していった。盛岡都市美協会も、椽内に言わせれば、「今の都市美協会にしても、何も僕を立役者に擬する気ではないが、僕が盛岡に帰った当座はちょいと燃えるが、東京に帰ってくると、ペサッとなって了うような嫌いがある。」^{文 21)}という様子であったが、活動自体は設立後、3年ほどは確認できる。ただし、1938年に椽内の強力な支持者であった岩手日報社の後藤清郎と椽内との関係が岩手日報社内紛への関わりによって悪化し、盛岡での都市美運動は休止となった。

3.3 椽内の計画思想・実践との応答関係

椽内は東京を生活の拠点としながら、故郷盛岡との関わりを持ち、その都市計画や都市美運動に深く関与した。そのためのもう一つの拠点が盛岡市加賀野の「プロレタリアの小住宅」であったと推測される。椽内の都市計画に関する思想は、1926年に出版した『都市計画』、1934年に出版した『日本都市風景』などの著者から読み取ることができる。

前者『都市計画』には、先に都市計画分野の中心的な雑誌『都市公論』に発表していた論考「都市美化運動と都市芸術」が収録されている。この論考で椽内は従来の都市計画関連図書に関して、「いかにも無味乾燥で食いつきが悪いのです。随って、「都市計画」ということも、今日、普通の人の考では、それは専門家畑のもので、所謂素人の容喙を許さぬもののように決めている風であります。」^{文 22)}という問題意識を綴り、「「都市計画」ということも、私共の家の前の道路の具合や、塵芥、掃除、などといった日常茶飯事の続ききいである」^{文 22)}との主張を込めて、「都市芸術」を基本理念とした都市計画論を展開した。「都市芸術」とは、「内部から発する、社会生活のいみがたき表現」²²⁾であり、「装飾ということに止まるのではなくて、市民の生活に必要であるところの、あらゆる施設、行政、経済、交通、保安、衛生、教育等一切の都市の施設を含んでいる」^{文 22)}ものであった。『都市計画』の末章は、「都会の幻想（ビジョン）」と題して、かつてウィリアム・モリスが自身の社会ビジョンを文学作品として鳥瞰的に描き、読者に来るべき社会のイマジネーションやインスピレーションを与えた『ユートピア便り』に発想のヒントを得て、椽内の将来の都市の夢が綴られている。椽内は今後数十年間は外国都市の模倣の時代が続くが、次第に街路系統、ブルーパールや公園系統、上下水道といったインフラが時間をかけて整備されていくに従い、市民の意識が次のように変化すると予想した。

「これまで自分の家さえよければ他はどうでもいいと思っていた市民は、漸次共同の住家としての都市のいう

ものを考えるようになり、都市が段々整頓し、活動に便利であるということと同時に、愉快な所ということになれば、自づからシビックプライドを感じようになり、始めて愛市中心の芽が萌出し、自治の精神にめざめるようになるでしょう。斯した経路をとって、我国の都市は、当然模倣の域を去り、更に独創の時期に進んでゆくのではないのでしょうか……その時期になつては、都市改造の動力は、役所ではなくて、市民の共同に移り、随分思い切った改造計画が企図されるようになるでしょう」^{文 22)}

模倣の時代が終わり、独創の時代に入ればしばらく経つと、建物は簡素な塗りごめ造風の建築等、あらゆる施設が調和的に統一されている都市風景が広がるとした。椽内は、将来的な都市改造の動力が役所から市民の共同に移行するという、主体の変換までを見据えていたのである。

そして、この模倣の時代の終焉と関連するのが『日本都市風景』で展開された都市の個性としての都市風景論であった。椽内は全国各地の都市風景＝都市の個性について語る都市風景紀行文を数多く執筆した。『日本都市風景』は、それらを集めたものであった。この書籍を通じての椽内の主張は、「地方の都市の人々はその都市がそれぞれもっている地方色というものを認め、ただいたずらに大都市の模倣なんかせずその独自の「持ち味」をなるべく醇化助長するようつとめて一層好ましい風景をもつ都市を造る方に今後方針を代えるべきだ」^{文 23)}という一文に尽きる。

椽内が盛岡に構えた「プロレタリアの小住宅」は、第一に建築として、地方色を活かし、それを醇化助長する取り組みの実践であった。そして、第二に場所として、市民主導の都市改造の動力、つまり市民運動組織を生み出す場であり、そのために椽内が盛岡に滞在する拠点であった。椽内の計画思想とその実践において、この住宅は重要な役割を担っていた。

4. 大村虔一の世田谷生活圏における冒険遊び場活動

4.1 大村の住まい歴

大村虔一は仙台の台の原丘陵の麓の自然豊かな環境で少年時代を過ごした。東北大学建築学科を卒業した後、東京大学都市工学科の大学院修士課程に進み、高山英華研究室で高蔵寺ニュータウン計画などを担当した。修士課程修了後に助手に採用された。この助手時代の1964年に東北大学の後輩の璋子と結婚し、世田谷区砧町の木賃アパートで新婚生活を送った。1965年には助手を辞し、大学院の同級生であった土井幸平、南條道昌の二人とともに都市計画設計研究所を設立した。1966年に長女、1969年に長男が誕生したが、そのことを契機に砧町からもそう遠くない世田谷区経堂の分譲マンションである経



図 4-1 1970 年代の世田谷区経堂と大村虔一・瑠子夫妻の自宅および冒険遊び場活動地
(1970 年の東京都 3 千分の 1 地形図 (全国 Q 地図より) をベースに、1976 年の住宅地図を参照して公園や空地、本研究に関連する場所を著者加筆)

堂コーポラス (1967 年竣工) に引っ越した。妻・瑠子は和光学園中学校で教鞭をとっていた。和光学園の最寄り駅が経堂駅であった。大村が東北大学教授に転任する 1995 年まで、大村夫妻はこのマンションで暮らし続けた。1995 年以降、大村は仙台市の実家 (青葉区台原 4 丁目) に親と住み、時々上京する生活となった。瑠子は 2008 年に入院するまで経堂のマンションに住み続け、最後に仙台の病院に転院した。

4.2 大村夫妻による住生活と冒険遊び場の実践

大村夫妻が 1967 年から暮らし始めた経堂は、すでに市街化が進み、農地や空地が姿を消し、子供たちが自由に遊べる原っぱが少なくなっていた。経堂コーポラスの 5 階の夫妻の住まいは、2LDK の間取りであった。経堂コーポラスは駅から続く農大通り商店街を少し入ったところにあった。駅前にはデパートがあり、商店街には八百屋や肉屋、寿司屋などが軒を連ね、賑わっていた。大村夫妻には二人の子供がいたが、一人は区立桜丘小学校、もう一人は私立和光幼稚園、小学校に通った。何れも住まいからの距離は同程度であった。そうした環境の中で、子育てをしていた。

大村虔一が後に翻訳することになる『都市の遊び場』の著者、アレン・オブ・ハートウッド卿夫人と出会ったのは、1970 年の新宿新都心協議会の仕事での海外視察旅行の途上であった。翌年には鹿島出版会での翻訳出版が決まった。瑠子は英語が得意であり、育児や教員の仕事以外での自分のやるべきこと、自宅でやることを探し

ていたこともあり、虔一に先行して翻訳を行うことになった。瑠子の翻訳に対して、虔一が建築、都市設計の知識で検証し、校正していった。1973 年に『都市の遊び場』が出版されると、すぐに増刷が決まるほど評判となった。そして、1974 年には二冊目の共訳書『新しい遊び場』も出版された。同年、瑠子は 3 週間の欧州の旅行に出かけ、ハートウッド卿夫人とも会い、様々な遊び場を見て回った。帰国後、旅行で撮りためたスライドの上映会を経堂の自宅、階段踊り場、和光幼稚園、和光小学校、桜が丘小学校、東京電力経堂営業所など、地域の様々な場所で開催した。上映会に参加した人たちの間でこうした遊び場を経堂で実現させたいという思いが高まっていった。

1975 年になると、PTA の校外班を中心に、遊び場の実現が模索され始めた。ちょうど学区の中央を流れる鳥山川の暗渠化事業が進められていて、遊歩道整備が行われる前の段階で空地となっていた。その幅 10m、長さ 85m の河川暗渠化でできた土地を世田谷区から借りることができ、夏休みの前後を含む 3 ヶ月の住民運営の「経堂こども天国」が作られた。大村夫妻や桜丘小学校や和光小学校に子供を通わせている親たち (PTA) や商店会関係者が設営、運営を担当し、そこに大村が声をかけた日本大学建築学科の関沢勝一教授の研究室や武蔵野美術大学の及部克人教授の研究室の学生もボランティアで関わった。

経堂こども天国は翌 1976 年の夏にも開催されたが、会場となった土地は緑道整備が行われたため、使えなくなった。そこで翌年以降の開催地を探す中で、桜ヶ丘小学校の学区の隣にある笹原小学校のすぐ近くに児童館の建

設予定地が空いているのを見つけた。その土地が 1977 年 7 月から 1978 年 9 月まで、桜ヶ丘冒険遊び場となった。経堂こども天国に関わっていた人も一部、引き続き参加したが、加えて新たに笹原小学校の PTA 関係者も運営に参加した。また、大学生たちも、東京農業大学や北海道大学、大妻女子大学などの学生も夏季休暇などを利用して関わるようになった。

経堂こども天国、さらには桜ヶ丘冒険遊び場の運営に関わるこうした多様なメンバーたちの会合が行われたのは、大村夫妻の住まいである経堂コーポラスであった。2LDK の一間はこうした会合のために開放されていた。桜ヶ丘冒険遊び場の土地は、区民センターの建設が決まり、退去しなくてはならなくなり、大村は継続を目指して、世田谷区と交渉した。世田谷区は国際児童年（1979 年）の記念事業を検討していた世田谷区は、羽根木公園でプレイパークを設置することになった。1980 年度には羽根木プレイパークは区施策として継続となり、常設化した。羽根木プレイパークの運営委員長は度一が務めたが。また、羽根木プレイパーク設置と合わせて、1979 年には璋子が代表を務めるかたちで IPA（国際プレイパーク協会）日本支部が設立された。大村夫妻の住まいは、IPA 日本支部の事務局にもなり、その後手狭になったため、偶々空いた隣の同じ間取りの住居も購入し、経堂コーポラスの住まい兼活動拠点は規模を広げることになった。羽根木公園は経堂地域からは鉄道で二駅ほどの距離にあり、日常生活圏の外にあった。冒険遊び場活動の担い手は、大村夫妻と学生時代から関わりプレイリーダーとなったボランティアを除いて、経堂こども天国や桜ヶ丘冒険遊び場に関わっていた経堂周辺の地域の人たちから羽根木公園周辺の地域の人たちに交替していった。大村夫妻にとっても、住まい周辺での活動ではなくなり、その位置づけは変わっていった。

4.3 大村度一の計画思想・実践との応答関係

大村は『都市の遊び場』（1973 年）のあとがきにて、この本の原書を初めて手にした当時、「私はいくつかの地区設計に関係し、住む機能が都市から次第に追い出されることに疑問を持っていた」^{文 24)}と書いている。大村が同級生たちと立ち上げた都市計画設計研究所は順調に仕事を受注し、規模が大きくなっていった。ここで大村が言及した地区設計の仕事の一つは、1970 年に東京都から受注した赤坂霊南坂地区再開発基本調査であった。後に森ビルによる再開発事業、赤坂アークヒルズの建設につながっていく調査である。大村は次のように回想している。

「私はその頃コンサルタント業務をおこなっていたのですが、その数年前に、赤坂霊南坂地区の再開発計画を東京都や港区に委託されました。赤坂の今のアークヒルズ

です。その時、気がついたことがあります。計画を作るために地元の人にこのまちづくりの願いとか希望をヒアリングしますといい意見があるのですが、計画がまとまって港区が計画の発表会をやったり、あるいは港区主催の意見を聴取する会を開いたりしますと、この間会って話を聞いた人がこんなことを言うのだろうかと思うような非常に違った意見が出てくるのです。（改行）個人の顔を持っているときの話と、みんなと大きな会場に集まって話をするときの違いに非常に驚きました。特に大勢で集まったときの意見は、政党などからのアドバイスや力が加わって、なかなか素直な意見が出てこないことを実感しました。（改行）そこでわれわれがみんなの家を訪れてヒアリングをした時に聞いたような言葉が、もう少し積極的にまちづくりにつなげる手はないものだろうかと考え始めたわけです。そういえば自分の子どもを育てていて、都市の中で子どもを育てる上でいろいろ疑問に思っていることとか、こうありたいと思うようなことがある。これを基にまちづくりにつなげる手だてはないだろうか。そういうことを地域の人と一緒にやってみよう、という思いで始めたことであります。」^{文 25)}

大村は先に言及したあとがきにて、自分たちの子供たちに豊かな体験をさせてあげられないかという個人的な関心から始まった翻訳であったが、次第に多くの都市計画家や行政職員にとって大事な内容を含んでいることに気づいた旨を綴っている。そして、「最近各種の建設活動に、地区住民の意見が大きな力を持つようになった。この住民パワーを今日のような否定的な意志表示にとどめず、明日をつくる子供たちの健全な発育を期待する積極的な活動へと転換すべき時ではないだろうか」^{文 24)}か問いかけた。二冊目の訳書『新しい遊び場』（1974 年）では、本来の原書タイトルに適合した『冒険遊び場』というタイトル案が、「冒険」という言葉が危険だということで採用されなかったというエピソードを紹介しつつ、「自分の能力に挑戦しその可能性を開発する場」^{文 26)}が子供たちに必要であるという本の趣旨を確認したあと、最後に「この子供たちのために、消費者になりきり、自らものを創り出すことを忘れてしまった親たちのしてやれることは何だろうか。私たちも本から離れて、自分たちの冒険を試みる時に来ているのではないだろうか」^{文 26)}と、行動への決意を綴った。経堂こども天国が始まるのは、この二度目のあとがきを書いた翌年である。

つまり、大村にとって、冒険遊び場活動は仕事としての都市計画に対する問題意識に端を発し、住まい手を住めなくする都市計画ではない、住まい手が主体となり、自ら手を動かしていくまちづくりを探究する冒険であった。自らも住まい手として、その暮らしている地域で展開することに意味があった。こうした都市計画思想の転

換が、都市計画設計研究所での仕事にフィードバックされたかどうかは不確かであるが、1995年に母校の東北大学に戻り、立ち上げた研究室では、都市デザインとまちづくりの融合を図る活動が展開されることになった。

5. まとめ

以上、日本の都市計画史において、「都市をつくる」と「都市を生きる」ことを重ねあわせた領域を意識的に探究した3人の都市計画家、石川栄耀、椋内吉胤、大村虔一について、彼らの住生活の様相と都市計画の思想・実践との応答関係を明らかにしてきた。時代も場所も異なる3名であり、それぞれの動機をもって、アーバニスト的な行動をとることになった。共通していたのは、都市計画の担い手に関する問題意識がアーバニスト的活動を導いたことである。さらに、より具体的に彼らの住まいに着目すれば、3名とも住まいを家族だけでなく、地域活動の拠点として開く経験をしていたことに気づく。近年、こうした住まいを開く行為を「住み開き」として注目されてきている。その定義や効果は「個人宅をちょっとだけ開くことで小さなコミュニティが生まれ、自分の仕事や趣味の活動が他者へと自然にかつ確実に共有されていくのだ。そこでは無論、金の縁ではなく、血縁でもなく、もはや地縁でも会社の縁でもない、それらが有機的に絡み合う「第三の縁」が結ばれるのだ」^{文27)}とされる。本研究で事例としてとりあげた3名の都市計画家の住生活も、このような住み開きによる縁（人のネットワーク）によって、「都市をつくる」と「都市を生きる」を重ね合わせる場となったのである。おそらく、都市計画史を紐解けば、その重ね合わせの多様な様相がさらに掘り出すことができるだろう。そして、それらの経験の蓄積は、現代の都市計画家の「アーバニスト的転回」^{文28)}を理論的、実践的に後押しすることになるだろう。

<注>

- 1) 研究の過程では、自邸を実験住宅として繰り返し設計した計画家・秀島乾、自邸周辺の地域コミュニティについて興味深い言説を残していた元東京都首都整備局員・山田正男、クラインガルデン付き住居を自ら設計した高蔵寺ニュータウンに構えた津端修一の3名についても調査を実施した。しかし、秀島、山田の両名については、住生活面において、自宅周辺での地域活動が確認できなかった。津端については、高蔵寺ニュータウンでのドングリ大作戦など地域活動の展開が見られたが、高蔵寺ニュータウンの公団住宅から出て構えた自邸で本格的に暮らし始めたのは、広島大学退職後であり、住生活と都市計画の仕事との同期的関係とは異なると判断し、分析対象からは外した。彼らについても、今後、更なる調査が必要である。
- 2) インタビュー対象者、実施日は以下のとおりである。
 - ・小川惇（久慈設計顧問、2023年9月11日）
 - ・三浦幸雄（都市計画設計研究所代表取締役、2024年2月14日）

- ・山田順子（山田正男長女、2024年2月16日）
 - ・関戸まゆみ（日本冒険遊び場づくり協会元代表、2024年3月25日）
 - ・斎藤啓子（武蔵野美術大学教授、2024年6月20日）
- 特に大村虔一の住まい歴および住生活については、三浦氏、関戸氏、斎藤氏へのインタビューに基づいて記述した。

<参考文献>

- 1) 中島直人＋一般社団法人アーバニスト：アーバニスト 魅力ある都市の創生者たち、ちくま書房、2021.11.
- 2) 西山卯三：住み方の記、文芸春秋新社、1965.
- 3) 石田頼房・石田裕子：二人で歩いた まち むら 人生、南風舎、2006.
- 4) 伊藤滋：昭和のまちの物語 伊藤滋の追憶の「山の手」、ぎょうせい、2006.
- 5) 田村明：東京っ子の原風景、公人社、2009.
- 6) 中島直人・西成典久・初田香成・佐野浩祥・津々見崇：都市計画家石川栄耀 都市探究の軌跡、鹿島出版会、2009.3.
- 7) 中島直人：都市美運動 シヴィックアートの都市計画史、東京大学出版会、2009.2.
- 8) 林泰義：まちづくりプランナーの役割、新市、36(6)、pp.10-16、1984.6.
- 9) 石川栄耀：若き日の名古屋、新都市. 5(10)、pp.73-77、1951.10.
- 10) 根岸情治：都市を生きる 石川栄耀縦横記、作品社、1956.
- 11) 鼓肇雄：千種区の今昔（二）、地域社会、8(2)(14)、pp.59-71、1984.3.
- 12) 三上孝基：名古屋住宅時代、持寄文集、pp.205-207、名古屋公衆図書館講和会、1936.
- 13) 石川栄耀：名古屋の区画整理の特質（上）、都市問題. 9(4)、pp.67-90、1929.10.
- 14) 石川栄耀：郊外集落結成の技巧、都市公論、13(10)、pp.27-58、1930.10.
- 15) 石川栄耀：市民倶楽部三相 「郷土都市の話になる迄」の断章の十六、都市創作、4(4)、pp.5-14、1928.3.
- 16) 小野二郎：郷土の思ひで、岩手日報、1933.1.1.
- 17) 評論 都市計画調査会に就て、岩手日報、1926.1.12.
- 18) 岩手日報、夕刊、1927.7.22.
- 19) 岩手日報、1928.1.17.
- 20) 岩手日報、1928.1.18.
- 21) 栃内吉胤：盛岡俳記（六）、岩手日報、夕刊、1935.8.31.
- 22) 椋内吉胤：都市計画、のれん屋書房、1926.
- 23) 椋内吉胤：日本都市風景、時潮社、1934.
- 24) アレン・オブ・ハートウッド卿夫人（大村虔一、大村璋子訳）：都市の遊び場、鹿島研究所出版会、1973.
- 25) 大村虔一：『自分たちの暮らす都市をみんなで作る』という意識、日本都市学会年報、pp3-9、2001.
- 26) アービッド・ベンソン編著（大村虔一、大村璋子訳）：新しい遊び場、鹿島研究所出版会、1974.
- 27) アサダワタル：住み開き 家から始めるコミュニティ、筑摩書房、2012.1.
- 28) 長崎敏音：名古屋市住宅会社創立に就て、都市公論、2(10)、pp.42-47、1919.10.
- 29) 中島直人：都市美運動に関する研究、東京大学学位論文、2006.9.
- 30) 吉田義昭：明治大正昭和盛岡事始め¹⁹ 市営住宅のはじまり、街もりおか、238、表紙裏、1987.10.
- 31) 大村璋子編：遊びの力 遊びの環境づくり30年の歩みとこれから、萌文社、2009.